

René Laurentin,

Visage de Bernadette,

2 vols. pp. 207, 144

Paris, P. Lethielleux, 1978

関 一敏

人間の顔というのはよく見ればじつに奇妙なものである。志賀直哉は車中の親子づれをみて、親同士は似ていないのに子供が双方に似ている情景は不思議だと語っている（『網走まで』）。似ている似ていないの問題は人間同士ばかりでなく、わずかの変形操作によって動物との関係にまで広げることができる。トーテミズム批判の人類学が人の顔と動物のそれとを戯画的に類比してみせたのも、人間の思考がそうした関係にみとめてきたアナロジーの根強さを示している（C. レヴィ＝ストロース『野生の思考』）。人間の顔に表情があるように、動物にも顔によるコミュニケーションをみだしたのはダーウィンだった（『種の起源』1859、『人と動物の感情表現』1872）。しかしそれに必要な博物学的資料を提供したビーグル号乗船（1831—36）がもう少しで実現せぬことになるところだったという話がある。ダーウィンの顔が、とりわけその鼻の形が航海者にふさ

わしくないと船長が考えたからである。どうやらこの船長は十八世紀の人相学者ラーヴァターの信奉者だったらしい。人間の顔は歴史を動かしかねない。

『種の起源』が英国で刊行された前年、1858年にピレネー山麓ビゴール地方（仏）では新たな巡礼地が発生しつつあった。ルルドの町はずれの洞窟に聖母が出現し、十四才の貧しい少女にさまざまなメッセージを託すとともに、十八回の出現途上で湧出した泉が病氣治しの奇蹟を次々と生みおとしていったのである。少女の名はベルナデット・スビルー（1844—79）という。現在年間三〇〇万の巡礼を数える世界有数の聖母巡礼地も、ことの発端は少女の見た「何か白いもの」の出現にすぎなかった。その姿を目でとらえ、その声を耳にすることができたのは彼女ひとりだった。ここから体験者ベルナデットにつきまとい何らかの形で接触を求める人々の

群れが生ずる。民衆に限らず、聖職者のなかにもその持ち物（とくにロザリオ）を欲する者が少なからずいたとある。こうした周囲の熱狂的な関心に向けられたベルナデットの拒絶反応には、痛ましいまでの頑なさがみてとれる。与えられた金品を「手が焼ける」とつきかえした話、奇蹟の泉への無関心ぶりや、つきまとう群れへの叫び（「私は司祭じゃない」）等々。しかし時を追ってふくれあがる巡礼の群衆にとって、洞窟や泉の水以外に聖母との回路を保証する存在は、しかも生きた媒介としてはベルナデット以外になかったことも事実である。人々は聖母を体験した者を見ることを、またその話を聞いて触れることを欲していた。十九世紀社会技術史上の発明がそこで真価を発揮することになった。写真の生産である。

写真術の発想そのものは中世からルネサンスに遡るが、人間の顔と姿を肖像画にかわって保存しようようになったのは十九世紀前半である。社会的実用化はダゲール（1799—1851）の銀板写真法（1839年公開）を嚆矢とする。多くの発明がそうであるように同時代の多数の競争者との一種の協力体制のなかからこの手法が歴史に登場して以後、紙ネガティブ（1840）、コロジオン湿板法（1850）の開発をへて近代的写真術が誕生するにいたる。その強みは低廉な価格と柔軟な技術力にあった。それまでの肖像画の社会的特権性を剝奪し、撮る者と撮られる者の大衆化をひきおこした。写真術の社会的浸透は肖像と風景にとどまらなかった。異国・異民族の撮影にはじまり、顕微鏡（1840、53）天体（月1840、太陽1845、星1857）司法関係（1854）海底（1856）航空（1858）山岳（1861）測量（1861）と被写体を次々に開拓していったのが1850年代から60年代である。それは恰もルルドの聖母出現の時代にあたっていた。

写真技術の発達とこれともなう記録手段の拡大は、ヨーロッパ近代カトリシズムの歴史をある意味で動かし、女性の顔を後世に残すことになった。被写体はもちろんベルナデットひとりに限らなかつた。十九世紀聖母出現サイクルの端緒とされる「奇蹟のメダル」鑄造の媒介者カトリーヌ・ラブレ（1806—76）の顔も残されている。しかしその体験が1830年でも写真の日付は1876年にすぎず、ベルナデット以後である。聖人史のうえでは「アルスの司祭」（1786—1859）の死の床の写真（1859）を始めとして、ベルナデット（1861—8）、カトリーヌ（1876）、リジューのテレーズ（1876—97）の生前の写真がつづく順序であり、生きた写真を残した最初の聖者がベルナデットということになる。写真の保存状態は、しかしながら決して良好とはいえなかつた。写真の散逸状態のほかに、

変形修正によるオリジナルの毀損、しばしば不明確な日付の問題等々があり、聖女の「本当の」顔を見つけ出すには古文書の編纂と校訂に似た作業をつみ重ねる必要があった。

この根気のいる仕事を聖母出現をめぐる資料発掘作業のいわば副産物として試みたのがR. ローランタン（パリカトリック学院教授）とその協力者たちだった。聖女没後百年を機に刊行された二巻本は『ベルナデットの顔』と題されている。一巻は分析・資料からなる紹介篇、もう一巻はアルバム篇である。紹介篇（第一巻）には七名の撮影者による75枚のオリジナル写真の撮影日時・状況説明のほか、十数枚の肖像画に関する同種の資料を収め、写真からみた人相学的分析の報告を二篇そこに加えている。アルバム篇（第二巻）は75枚の写真を中心にそれらを修正加筆したとみえるまがいの作品を並べて掲載する形である。出現にまつわる証言資料の編集・校訂（*Lourdes: Documents authentiques*, 7vols., 1957-66; *Lourdes: Histoire authentique*, 6vols., 1961-64）に施したのと同じ細心綿密な配慮が全体にいきわたっており、「本当の」出現譚再構成に一貫してたずさわってきた編者ローランタンの強い意志力を感じさせる二巻本である。

しかしそれにしても、数多いルルド関係の刊行物のなかでも本書は異彩をはなっている。ひとつには編者の十九世紀聖母出現にける資料蒐集の熱意と意気込みがベルナデットの顔の復元にまで及ぶことへの驚嘆の想いがある。もうひとつは写真技術と宗教（的なもの）との結合が一種の違和感を見る者に与えることである。この一方の驚嘆と他方の違和感、大げさな表現だが十九世紀カトリシズムと近代との格闘がもつ歴史的意味の探究へと、たとえば評者の夢をさそう。聖者と写真、霊性の映像化、不可視の存在を視覚化する試み。写真に体系される近代の技術的世界観が伝統的なもの（民俗的・宗教的世界観）にいかなるインパクトを与え、また逆に後者がどのような変容過程のなかで前者を吸収・排除してきたかを考える上で、一連の十九世紀聖者たちの写真には恰好の素材がみいだされるに違いない。列聖された教会の聖者に限らなければ、教会の関与してきた聖母出現例ではルルド（1858）ポンマン（1871）に出現時の写真はなく、出現後の記念写真か出現中を装ったのちの写真のみが残されている。二十世紀のファティマ（1917）では出現時の群衆と聖母の現われる空が記録され、下ってガラバンダール（1961—65）では出現中の四人の少女の表情やホスチアの奇蹟が至近距離で撮影されることになる（聖母との問答も録音された）。いうまでもなくこのことは写真術の簡便化と社会的浸透の反映ではあるのだが、いっぽうで社会技術史的側面が民衆の

心意におよぼしてきた時代の心性への影響力の強さを考えなければならない。1974年テレサ・ムスコの例では聖母の写真が血の涙を流すにいたる。つまりそこではシラクサの石膏の聖母像の涙(1953)のように写真がアイコンの役割を少なくとも民間レベルで果しつつあることを物語っている。写真を媒体とする奇蹟的出来事への信仰には、奇蹟を写真に残そうとする心性と同一のものがみいだされるのであり、これは「複製技術時代」の宗教史のなご開拓すべき一課題である。

このアルバムは聖母を目と耳でとらえた一女性の姿を集めており、上にのべた社会史や宗教史とはかかわりなしにも見る者の心を誘うところがある。出現はひとつの事件だが、一生の間のごく僅かの時間を占める出来事にすぎない。しかし聖母を目でとらえ、耳で理解してしまったひと握りの体験者たち(主として子供)は、周囲の人々や教会の輪の中にその後の長い時間を持続的に「体験者」として過さなければならなかった。アルバムのベ

ルナデットは時にうんざりした顔つきや頑なな表情をみせながらさまざまなポーズを残している。「だって聖母はいないのに」といいながらもロザリオを手に出現時の再現写真に渋々応じてもいる。そうした写真のうちには合成・加筆の手が加えられて出現中のベルナデットとして流布されたものも少なくなかった。

世界をある意味で動かした者としてではなく、ひとりの少女が周囲にとって類のない体験をしてしまった後の顔としてこれらを眺めるなら、そこに呼び醒まされる感慨には一種個人的な想いがつきまどってくる。体験者の顔の向う側、心のほうへと入って行きたいと念じてみても、今はその方途がない。

註)写真術の歴史についてはJ. A. ケイム『写真の歴史』(クセジュ文庫, 1972)を参照した。ベルナデットの生涯はR. ローランタン『ベルナデッタ』(ドン・ボスコ社, 1979)を参照のこと。